

「はひ……♡」

ミオは起き上がってツインテールを差し出した。べつとりと白濁した愛液がこびりついた手を柔らかな髪の手で拭き取る。片方はヒナノの匂いが、もう片方にはミオの匂いが染みついていた。

「はあ……♡ ツインテがずつしり重たくなっちゃいました……♡ すーっ……♡ はーっ……♡ ヒナノちゃんの匂い……♡ こういう匂いだったんですね……♡」

（いいな……♡ それ……♡ ミオは私の知らないところで色々教えてもらってたんだ……♡）

おじ様はおもむろに服を脱ぎ始めた。

パンツ以外は全て乱暴に脱ぎ散らかす。ヒナノとミオは落ちた服を拾って、丁寧に畳んだ。それが雌のやるべき仕事だとは言われていないのに、やらなければならぬと感じた。尽くすことすらマゾ本能を満たしてくれた。

おじ様の服を畳み終えてようやく二人は脱ぎ始められる。脚に引っかけていたパンツを脱ぎ、他も全て脱いでいく。生まれたままの姿になった二人には最初にやるべきことがあった。

ミオにそのやるべきことを耳打ちされたヒナノは冷たい床に正座して三つ指をつく。
 ミオも一緒に頭を下げると、乳肉は床で潰された。

「おまんこをいっぱい可愛がってください、ありがとうございます……♡ おかげで子宮に支配された弱い頭でも雌の立場を理解することができました……♡」

言葉を紡ぐ度にヒナノの背筋はゾクゾクと震えた。男は上で女は下、その単純な事実を認めるだけでなぜこれほどまでに思考が溶けてしまうのだろうか。ミオがヒナノの言葉に続く。「私たちの痴態でイライラしているおちゃん様をどうか甘やかさせてください……♡ 身体のだこを使っていただけでも差し支えありません……♡ ヒナノちゃんの処女膜もパパのものです……♡ 極上の雌を差し出すので、どうか……♡ どうか……♡ この安くて卑しい駄肉にもお情けを……♡」

必死で媚びる雌畜生が二匹。もはや人間としての尊厳はそこになかった。

彼女らの献身を慰めるのが主人たる雄の役目だ。それは優しく頭を撫でてやることか？ いや違う。そんな生温い褒美など畜生に愛想を尽かされてしまうだけだ。雄が雄らしく振る舞う。それこそが雌畜生共の悦びであり、幸せだ。

「ふかっ♡♡♡」

二匹の頭が重くなる。後頭部がやけに重い。蒸れた汗の臭いで髪の毛が汚された。雌畜生は足置きにされていた。二匹いるからちようどいい。優秀な雄に仕える雌は一匹では満足に仕事が出来ないと言われる理由の一つだ。

額が床にぐりぐりと押しつけられる。この重みこそがマゾ雌には必要なのだ。灰皿、ティッシュ、足置き、私たちを便利につかってくれてありがとうございます。

「頭を上げろ」

おじ様が足をどかしている間に、二匹は顔を上げる。足置きとしての役目が終わったわけではないのは十分に理解している。次はどこに足を置きたいのか本能で分かる。

おじ様の足は二匹の美少女顔を踏み潰した。ボールの上で笑顔を振り撒き、一部の男からはズリネタとして消費されている極上の美少女JK。その価値を踏みにじる。傷一つない綺麗な顔で育てられたのに、雄の身勝手さに蹂躪された。

「綺麗にしろ」

当然足置きだけで終わるわけがなかった。足拭きになるのも雌畜生の仕事の一つだ。

二匹は競うように足裏を舐める。ガサついたかかとも、汚れのたまった足の指の間も丁寧に舐る。

「パパのカッコいい御足を舐めさせてくれてありがとうございます……♡」
「私たちをここに連れてくるために、いっぱいペダルを踏んで疲れましたよね……♡ 私たちの顔に疲れもイライラもぶつけてください……♡」

二匹の顎先から涎がポタポタと落ちる。足裏が全て綺麗になる頃には、口の周りや頬も涎で汚れていた。これでは顔で足裏を拭けない。となれば次に使える部位は限られる。

面積が大きくて、疲れを癒やせる柔らかさを持っている。そんなものは一つしかない。

「んっ……♡ どうですか……♡ 私たちのおっぱい足拭きマットは……♡ 私のMカップ爆乳とヒナノちゃんのIカップ隠れ巨乳……♡ 一度に二つも使えるのはパパだけです……♡」

「足の指でぐにぐに♡ っておっぱい掴んでください……♡ おっぱいに跡が残るくらい乱暴に使用って欲しいです……♡」

踵を持って、乳肉にむにゅむにゅと押しつける。無駄に大きい乳面積のおかげで唾液は拭き取れたようだ。おじ様はただ乳肉の柔らかさを堪能している。ポールダンサーが好きなオタクくんが触れたくても触れられない極上の乳肉。雌としての優秀さを象徴する大きなそれは中年男性に足蹴にされていた。